

学校不適應の未然防止のためにⅡ

～前思春期の理解から関わりへ～



担任の先生への

インタビュー調査から見えてきたこと

京都府総合教育センターでは、「前思春期に学校不適應の萌芽があるのではないか」という仮説のもと、学校不適應の未然防止のために研究を進めています。

小学校、中学校、義務教育学校、府立学校、すべての校種において、教育実践の成果を上げるためには児童生徒理解が不可欠です。児童生徒理解に基づいて「関わる」ことこそが「学校不適應の未然防止」につながると考えています。

本研究で注目している「前思春期」の理解と関わりは、その後続く「思春期」の理解と関わりにも役立つものと捉えています。今、目の前の児童生徒に「どのような関わりが必要か」を考える資料として御活用ください。

小学校3・4年生の担任の先生に聞いた、前思春期の時期とは…(インタビュー調査から)

*本研究では、身体的な成長などから、11歳は思春期の移行期と捉え、9・10歳、つまり小学校3・4年生を「前思春期」と定義しました。

調査対象：小学校低・中・高学年の担任経験が複数回あり、教職経験13年以上の教員

自分たちでやってみたいと思うことが増える時期だ。

できない自分とできる自分に気付くようになる。

周りが見えてきて大人との意思疎通ができるようになるなあ。

理解から関わりへ

幼い子どもの部分と大人の部分の混在しているなあ。

前思春期の子どもたちの特徴って…



人との違いや同じところに気付くからこそ、子ども自身は不安になる。でも、友達に認めてもらうことで育っていけるんだ。

特に今どきの前思春期の子どもたちの印象って…

失敗することを恐れる子どもが増えている気がする。

気持ちを伝え合う力が弱い。気を遣って身を引く子どもとか…。

友達関係について教師の橋渡しを必要とする子どもが多いなあ。

対人場面でも学習場面でも想像する力が弱い子どもが増えているような気がする。

◆表面的には安定して見える前思春期。しかし…

前思春期は、友達関係の中で、人との違いに気付けるようになり、自分の気持ちを振り返ることができるようになります。同時に、大人の考えや様々な物事がわかり始める時期です。

加えて、「なぜ私は私なの?」と、これまで当たり前だと思っていたことが当たり前ではなくなる衝撃的な感覚(自我体験)を体験したり、「人間って何?」「宇宙の果てはどうなってるの?」とこれまで考えることがなかったことに疑問を感じたりする時期でもあると言われています。それゆえに、**心の中は大変揺れ動いて、不安や葛藤が生じやすくなる時期です。また、思春期以降の子どもたちの中にも、この前思春期の発達課題を持ち越している場合があります。**

前思春期の子どもに必要な体験や力

学ぶ力

- ◆ 授業の中でわかった、できた！という体験
- ◆ こつこつと努力する力
- ◆ 内容の定着、意欲、習慣など、学習の積み上げが大切

友達関係

- ◆ 学習・遊びなど、学校生活の中で、友達とつながり、深める体験
- ◆ 人と関わるための自分の思いを伝える力

主体性

- ◆ 自ら挑戦し、やり切る経験の積み重ねによって達成感を味わうこと
- ◆ 失敗を受け入れ、克服しようとする

小学校3・4年生

(前思春期)の時期とは…
(平成27年度の研究より)

◎「発達における質的な
転換期」です。

自分を客観視できる力が育つなど、自分中心の世界から他者と関係を結ぶ世界へと変化する時期です。特に、同世代との関わりが重要です。



*詳しくは、京都府総合教育センターホームページITECの「教育相談部 研究・教育コンテンツ」を御覧ください。

教員が大切にしている関わり

学習指導を通じた関わり

- ◆ この時期に求められる抽象的な思考を支えるための基礎・基本を定着させるよう働きかける。
- ◆ 最後までやり切れるよう見守る、一緒に考えるなど、失敗しても大丈夫という雰囲気をつくる。

社会性を育てる関わり

- ◆ 主体的な活動を尊重するなど子どもの力を信じて任せる。
- ◆ 個々の話をしっかり聴くなど一人一人の思いを大切に丁寧に関わる。
- ◆ お互いの違いを認め合えるような働きかけやグループでの活動など、関わり合える場を設定する。

◆子どもたちの内面の変化が生じる時期だからこそ・・・

この時期の子どもたちは、内面の揺れや不安を支えてもらえる安心感を求めています。だからこそ、学級において**自分が受け入れられる、大事にされているという体験が必要です**。学級に理解し合える人間関係、失敗しても許し許される雰囲気があれば、安心して学んだり、人と関わろうとしたりする力につながると考えられます。このことは、「**【包み込まれているという感覚】こそが安心や自信をもたらし、意欲を引き出し高めるもの**」という京都府の教育の基本理念（京都府教育振興プラン）に重なるところです。

教員がこうした前思春期の発達について理解し、個々の心の動きを敏感に感じ取りながら、子どもたちが安心して成長していけるよう関わるのが大切です。

